

2023年シンポジウム：地域における国立病院附属看護学校の役割と意義、今後の展望

北海道の看護師等学校養成所の状況と当校存続への取り組み－生き残りをかけた戦略－

坂本美和子[†]

第77回国立病院総合医学会
2023年10月21日 於 広島

IRYO Vol. 78 No. 6 (379–383) 2024

要旨

国立病院機構北海道医療センター附属札幌看護学校は、国立病院療養所時代の札幌市内3校を2003年に統合し、大型校として開校し21年目を迎えた。北海道の看護専門学校としての歴史は古く、北海道唯一のNHO附属養成所であり、高校や予備校からは国公立大学看護学部に次ぐような偏差値でレベルが高い学校と認知されている。

北海道においては看護系大学が13校あるが3年課程看護師養成所（以下看護専門学校とする）が37校と多く、2019年までは受験者数も看護専門学校の方がが多い状況であった。しかし、社会の流れと同様に看護系大学が募集定員を増やし、1学年定員を150名とした大学もあり、4年制志向が高まる中での学生獲得は激戦である。

当校においても出願数がピークだった2018年から応募者数は徐々に減少してきてはいたが200名を維持していた。その状況から2023年度入学試験では前年度より32.1%減少と激減した。北海道内の看護師確保状況は充足の見込みはたっておらず、地方の看護師不足は病院存続において重点課題となっている。社会の変化に対応し、国の政策医療や地域医療への貢献ができる看護実践者を育成している当校の役割は大きい。

北海道内の看護職員の需給状況からみても大学は就職の段階で道外への流出も多い。地域に根差した看護師養成所の学生確保は重要である。当校の存続をかけた出願数の回復をはかるための方策と結果、今後の課題について報告する。

キーワード 学生確保、3年課程、看護専門学校、入学試験

はじめに

北海道内の国立病院機構（以下NHO）の看護師養成所は、閉校や統合を重ね、現在は北海道医療センター附属札幌看護学校の1校のみとなっている。NHO看護師養成所として大型校になる以前からの

歴史があり、多くの卒業生を送り出してきた。NHOへの就職率も70%を超え、地域の看護師輩出へも大きく貢献している。

大学進学にかかる18歳人口が2018年を境に大幅な減少期に入った。看護専門学校の入学者総数は2010年以降毎年6万人を超えていたが、2018年を

国立病院機構北海道医療センター附属札幌看護学校 副校長 [†]看護師
著者連絡先：坂本美和子 国立病院機構北海道医療センター附属札幌看護学校
〒063-0004 北海道札幌市西区山の手4条6丁目2番22号
e-mail : sakamoto.miwako.rq@mail.hosp.go.jp
(2024年3月25日受付 2024年4月19日受理)

Status of Nursing Schools/Colleges in Hokkaido and Our Strategy for Sustainable Developmental Goals
Miwako Sakamoto NHO Hokkaido Medical Center Sapporo Nursing School
(Received Mar. 25, 2024, Accepted Apr. 19, 2024)

Key Words : student recruitment, 3-year-course, nursing school, entrance examination

表1 北海道内看護系大学と3年課程看護師養成所の学校数と札幌圏の状況

	北海道内	札幌圏
大学（国公立大学）	6	3
大学（私立大学）	7	6
短期大学（*2023年新設）	1	0
専門学校（3年課程）	37	8
合計	51	17

表2 北海道内看護大学と札幌圏の3年課程看護師養成所の定員数

		大学	養成所 (全日制3年課程)
1	A	50	
2	B	85	
3	C	100	
4	D	67	
5	E	100	
6	F	100	
7	G	150	
8	H	80	
9	I	90	
10	J	60	
11	K	50	
12	L	60	
13	M	100	
14	N		80
15	O		40
16	P		40
17	Q		40
18	R		80
19	S		40
20	T		80
21	U		30
合計		1092	430

※Nが当校

ピークに全体の入学生数は4年連続で減少している。そのような中でも大学の入学生は増加が続き、全国では2022年初めて「大学」が「3年課程の専門学校等」の入学生を上回った¹⁾。このように18歳人口が減少していく中で優秀な学生を獲得するためには、当校の理念である看護実践者を育成する看護学校としての役割や学校の魅力をいかに伝えるかが重要である。

1. 北海道内の看護師等学校養成所の状況

北海道内看護教育機関は、看護系の学部をもつ国公立大学が6校、私立大学7校、2023年4月に短期大学1校と3年課程の学校1校が新設され、3年課程の看護専門学校は37校ある（表1）。この数年で大学の定員数が増えただけでなく、それと同時に入学者を確保できず募集停止の決定や統合した専門学校もある。大学全入時代となり競合の多様化で専門学校は厳しい状況におかれており、なかでも当校がある札幌圏には看護系大学が9校、専門学校8校あ

り、1学年の定員数では大学全体で1092名、専門学校全体で430名となっており「大学6対養成所4」と大学も集中している（表2）。4年制志向が高まる中での学生獲得は激戦である。

2022年度の18歳人口は112万1285人（前年より1万9855人減）、大学進学率は前年度から1.7%上昇して56.6%と過去最高を更新した。全国と比較すると北海道は46.4%と低く、逆に専門学校進学率は全国16.7%に比べ22.8%で甲信越に続き北海道は2位と高かった²⁾。

2022年度の北海道内の受験者数推移をみると3年前と比較すると大学は横ばいである。その一方で看護専門学校は64.7%と減少し、この3年間で1,726名も受験者が減少している。入学者数の推移をみても看護専門学校の充足率は2021年に90%を割り、2022年は87.30%となっている³⁾（表3）。そして、看護専門学校の入学試験状況においては2023年度に推薦入学者が53%と一般試験入学者を上回った。

看護専門学校への進学者は一定数いるものの、10年前と比較した大学進学率は北海道が上昇率1位で

表3 北海道看護師等学校養成所過去10年間の入学者状況の推移

年次	課程数	1学年定員①	応募者数	受験者数②	合格者数	入学者数③	競争率 (②/③)	充足率 (③/①)	
大 学	2015年度	13	997	5,403	5,086	1,930	1,094	4.6	109.70%
	2016年度	13	997	5,395	5,088	1,869	1,073	4.7	107.60%
	2017年度	13	997	4,531	4,233	1,812	1,088	3.9	109.10%
	2018年度	13	997	4,946	4,647	2,096	1,105	4.2	110.80%
	2019年度	13	1,017	4,744	4,462	2,109	1,107	4.0	108.80%
	2020年度	13	1,035	5,193	5,013	2,058	1,124	4.5	108.60%
	2021年度	13	1,095	4,691	4,451	2,214	1,175	4.0	107.30%
	2022年度	13	1,095	4,723	4,456	2,159	1,174	3.8	107.20%
3 年 課 程	2015年度	33	1,487	5,709	5,465	2,206	1,449	3.8	97.40%
	2016年度	33	1,527	5,260	5,050	2,125	1,469	3.4	96.20%
	2017年度	35	1,607	5,261	5,015	2,198	1,513	3.3	94.20%
	2018年度	35	1,597	4,725	4,521	2,173	1,477	3.1	92.50%
	2019年度	36	1,637	4,297	4,894	2,086	1,477	3.3	90.20%
	2020年度	36	1,637	3,806	3,630	2,140	1,479	2.5	90.30%
	2021年度	36	1,637	3,764	3,565	2,045	1,460	2.4	89.20%
	2022年度	34	1,587	3,330	3,168	1,927	1,386	2.3	87.30%

注 1) 募集中止の学校養成所については課程数・定員から除く

2) 看護師課程のうち大学と3年課程を抜粋

3) 北海道保健福祉部地域医療推進局 医務薬務課 看護政策係：令和4年度(2022年度)看護師等学校養成所の状況より

あり、今後の入学者減少に対しては北海道内の看護養成所では重大な問題となっている。

2. 当校の入学応募数の状況

このような地域の背景があり、当校の入学試験応募者数の状況は図1に示すように、2018年度をピークに下がってきており、2023年度入学試験においては推薦入学者が6名と道内の学校では最も少なく一般試験応募者も32.1%減、合格者の最低点も下がる結果となり、入学充足率100%を維持できない状況となった。そのためこの3年間の入学者状況や他校の入試状況を分析し、入学試験のあり方を早急に見直した。

3. 高校訪問からの課題分析

高校訪問で進路指導部の担当教員からの具体的な内容としては、大きく以下の9点あげられた。

- ①生徒も保護者も早い時期での入学決定を希望する。
- ②推薦試験の種類や枠が増えた。
- ③推薦希望者がいれば指定人数より多く受けてくれる学校もある。
- ④入れそうな学校を選ぶ傾向にある。
- ⑤よって複数併願受験者が少なくなった。

⑥私大は授業料が高いが成績上位は全額免除という特待がある。

⑦北海道医療センターは偏差値が高く、一般試験で入学を目指すのはハードルが高い。

⑧大学ならどこでもよいというわけではなく、実績と信頼のある専門学校を勧める場合もある。

⑨高校では予備校からの情報をかなり頼りにしている。

入学試験や進路選択の考え方など、入試改革とともに変わってきた現状は想定以上のものがあった。

4. 2024年度入学試験への取り組み

1) 入学試験の見直し

受験者数の増加と入学者充足に向けて戦略的に取り組むことを学校運営会議で以下の4項目の方針を意思統一した。

- ①一定の学力を保持するために推薦入学者指定校数を16から42校へ増やす。
- ②推薦入学者の最低評定基準を設けていない大学もあるため、偏差値53以上、学校ランクC以上の進学校は「最低評定基準を3.3以上」と下げ、ランクに合わせて4.0まで段階的に設定する。
- ③推薦入学者試験の透明性を図るために、問題の作問と採点を外部委託した。採点基準を明確に決め点数



図1 当校の入学試験応募者数の推移

化する。

- ④一般入学試験はA日程へ変更し、年内に合格発表できるように計画する。

2) 募集活動

募集活動としては、はじめに1年生の卒業校への電話訪問を実施した。そして、入学試験要項の説明を直接行うために高校訪問エリアを拡大した。開始時期も例年より早めてゴールデンウィーク明けより道内50校の高校進路指導部への訪問を実施した。看護系志望者の動向について把握するとともに、北海道医療センターのPRや実習施設、就職状況など当校の強みを具体的に説明、オープンスクールなどのアナウンスをした。NHO病院のある函館・帶広地区は各病院の看護部長と同行訪問を行った。以前より業者主催の説明会には参加していたが、直接高校や予備校から進路ガイダンス参加の依頼も増えた。予備校は春秋年2回道内の高校を回り入試状況や学校の特徴について情報提供をしているとのことで、当校についての説明や高校の反応について情報交換を行っている。

3) 学校PR活動

PR活動としては学校ホームページの更新やオープンスクールなど在校生が高校と直接関われる場面を増やすこと、夏季休業中には卒業校への近況報告、病院行事において学生参加型でPR活動をしている。

5. 2024年度入学試験の結果

推薦入学試験については前年の5.7倍の応募があった(図1)。一般試験の応募者は前年の10名減にとどまり130名、一般入学試験の倍率は2.63倍と前年より大幅に上昇した。推薦入学試験募集の見直

しが大きく、一般入学試験の時期を12月に早めて年を越さずに合格発表するという日程も結果に結びついたと考える。

6. 今後の学校存続に向けた課題

学生確保については、入試結果を見てさらなる分析を行い推薦入学試験のあり方を検討していく必要がある。高校の進路指導部の先生も代わるため、学校とのつながりを強める上でも定期的な高校訪問や連絡などを積極的に行っていくことは重要である。北海道内は範囲が広く、片道300キロを超える地域に複数回の訪問は現実的に厳しいが、電話やメールなども活用しながら情報発信をしていくことが大切であると考える。また、受験生に対してはソーシャルネットワーキングサービス(SNS)も活用しながら発信し、在学生の生き生きした姿やタイムリーな学校情報を提供するために公式Instagram®も開設した。

私たちが一般入試だと思っていたものが一般ではなくなりつつあり、「学力試験ではない総合型選抜、推薦入試を使って合格しない人は損なこと」「今まで大学入学試験に必要だった偏差値は必要ない」などの情報が飛び交っている中、入試については多くの課題がある。志望校選びの際に重視するポイントで専門学校は、「学べる内容」「入試方法」「就職率の高さ」が上位という結果がある。アドミッションポリシーを明確にし、入学してきた学生の教育の質を上げる学校としての取り組みもより強化していく必要がある。学生が興味関心を持ちながら主体的に学べる授業計画を行い、臨床とのつながりも大事にして、他校では得られないより実践的な教育を常に

模索していくことが重要である。

おわりに

附属養成所の存続においては、魅力ある学校づくりとともに卒業後に就職したいと思える魅力ある病院づくりとブランディングを高めることが重要である。学校の知名度を維持し、看護職として幅広く活躍する卒業生を目標に自分の未来に期待がもてるような学校づくりをしていきたい。

〈本論文は第77回国立病院総合医学会シンポジウム「地域における国立病院附属看護学校の役割と意義、今後の展望」において「北海道の看護系大学・3年課程養成所の実情と当校存続への取り組み－生き残りをかけた戦略－」として発表した内容に加筆したものである。〉

利益相反自己申告：申告すべきものなし

[文献]

- 1) 厚生労働省「看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査」(Accessed Feb. 10, 2024, at <https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00450141&tstat=000001022606>)
- 2) 18歳人口推移、大学・短大・専門学校進学率、地元残留率の動向、リクルート進学総研、マーケットリポート2022、Vol. 106 2023年2月号、(Accessed Jan. 4, 2024, at https://souken.shingakunet.com/research/pdf/202302_souken_report.pdf)
- 3) 北海道 保健福祉部 地域医療推進局医務薬務課 看護政策係「令和4年度（2022年度）看護師等学校養成所の状況」。(Accessed Mar. 1, 2024, at https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/1/0/7/5/5/0/5/8/_PDF★05完成_養成所入卒.pdf)